民衆レベルからみた中国のイスラム
——南京市の回族の調査から——

西澤治彦

はじめに

このたびのシンポジウムでは、「内地回民社会の形成と現状——南京市における調査から」と題して、回族の歴史的な概況、江蘇省内での移住の歴史、南京市の回族の信仰生活、漢族との関係などについて、スライドを交えて報告を行った。シンポジウムで発表した内容は、すでに活字にしているいくつかの論文をベースとしているため、関心のある方はそちらの方を読んでいただくとして(1)、本稿では、論文ではあまり触れてこなかった問題も含め、視点を変え、試論として自由に論じてみたい。

一　回族の形成過程とその内部世界

回族は、数世紀に渡る長い歴史的な経過をへて、西アジアの諸民族と漢族とが融合して形成された、ある種、特異な「民族」である。もっとも、民族の成立とは本来こういうものであり、中国における最大の民族である漢族自体、同じように複数の民族によって長い歴史をへて形成されたものであり、回族だけが特異な存在というわけでもない。

それでも、集住地域はあるものの民族固有の「領土」を持たず、全土に広く分布していること、民族固有の言語を持たず漢語で生活していること、自分たちの祖先は西アジアからやってきたという意識と、その祖先同様にイスラーム教を信仰することによって、民族のアイデンティティーを保っているなど、回族が、いくつかの点で他の少数民族とは際立った特徴を有していることもまた事実である。

これらの特徴は、彼らが西アジアから中国に移住してきた民族であるということに起因する。その起源は唐代に遡るが、唐から宋代にかけてアラブ・ペルシア系の商人が海路、広州や泉州・揚州に渡り、蕃坊にて貿易を営んでいたが、モンゴル帝国の成立を機に、多数のイスラム教徒が元朝下の中国に移住した。色目人としての待遇を受けた彼らは、華北を中心に主要都市に分散して住み、「回回」と呼ばれた。この時の大量移住は主に陸路行われたと考えられる。

元朝滅亡後、彼らは明朝下の中国に留まり、漢語を話し、漢名への改姓を行い、漢人との通婚を行うなど、次第に漢人との融合を余儀なくされたが、イスラーム教の信仰だけは保持し続けた。その分布は河北・河南・陝西・甘粛・雲南などに拡大し、各地に中国独特の回民社会が形成されていった。しかしその経済的地位の低下はい

かんともしがたく、続く清朝下、「窮回」とまで呼ばれた回民は、活路を求めて中国各地に移住し、一九世紀には東北地方への移住が行われるなど、その分布はさらに拡大した。その一方で、雲南・陝西・甘粛・新疆などでは回民による反乱が相次いだ。

新中国成立後、政府は回民に少数民族としての地位をあたえ、以後、回民は公式名称として回族と呼ばれるようになった。そして一九五八年に、旧甘粛省東北部を割いて寧夏回族自治区を成立させたほか、二つの自治州と六つの自治区が集住区域に設けられた。

中国の回族社会は決して一枚岩ではなく、いくつかの地域ブロックに分けることができる。最も大きな分類は、西安を境とした、西安以西の「外地回民」と西安以東の「内地回民」という区別であろう。これは回族自身が使う語彙でもある。

西北地区は、回族の人口も多く、移住の起点であると同時に、イスラム諸国の宗教改革運動の波を直接受ける位置にある。一七世紀以降広まった、スーフィズム（イスラム神秘主義）や、清末以降もたらされたイスラム原理主義も混在しており、中国語ではこれを「新教」と呼んでいる。西北の回民は形質的にも西アジアの面影を残す、濃い眉毛や彫りの深い顔立ちの人が多い。

一方、内地回民は移住の歴史も古く、圧倒的多数の漢族に囲まれて生活しており、漢文化の受容の度合いも高い。形質的にも内地の回民は漢族と全く区別のつかない人も多い。宗派でいうと内地の回民はスンナ派のゲディム派に属し、中国語では「老教」と呼ばれている。

日本で回族というと、白帽をかぶり、アラビア風のモスクで礼拝する人々のイメージが強く、どうしても西北回民に注目が集まりがちであるが、私自身が調査した内地の回民となると、意外とその実情が知られていない。この内地回民は一見して漢族と区別がつかないばかりでなく、日常生活においても漢族と融和している部分が多い。

実際、私自身、南京に二年間も住んでいたわけであるが、市内の何カ所かに清真食堂があり、何度か食べにいったことはある。しかし市内に回族が四万人もいるなどとは、全く気がつかなかった。それだけ、表面的には南京の回族は漢族と区別がつかない、言い換えれば漢族社会に溶け込んでいるといえる。それでいて後述するように、両者の間には歴然とした境界が存在し、普段はそれが目に見えることはなくても、ある時になると、明確に浮かび上がってくる。

本稿ではこの内地回民に焦点をあてて、彼らのアイデンティティーと漢族との関係などについて考察してみたい。

二　圧倒的多数の漢族に囲まれた生活

内地の回族が、いかに圧倒的多数の漢族に囲まれた生活を送っているかを、江蘇省を例に数字でみてみたい。江蘇省内の少数民族の総人口は一一万〇六一四人（一九八二年の人口統計による）で、このうち回族は一〇万四二六八人と最大で、少数民族総人口の九四・二六％を占める。第二位は満族の二五一七人で二・二八％、第三位はモンゴル族の一七五九人で一・五九％を占めるに過ぎず、少数民族の圧倒的多数は回族で占められている。ところが、江蘇省の漢族人口は六〇四万一〇〇〇人で総人口の九九・八二％を占め、少数民族の一一万〇六一四人の占める比率は、僅か〇・一八％に過ぎない。いくら回族が少数民族の中では多数派とはいえ、漢族を前にしては、

問題にならないほど少数であることが分かる。

従って、内地回民には「独立」への指向などさらさら無い。信仰の自由さえ保証してくれれば、あとは静かに暮らしたい、というのが本音だと思う。

漢族の側からみても、清真寺の近所に住む人は別として、一般に清真寺に対してもさほどの関心を示さない。通常、清真寺には門があり、礼拝の時間外であれば鍵がかかっていることもあるし、少なくとも「郷老」と呼ばれる近所に住む退職した老人が「看門的」をしているので、一般の漢人がぶらりと中に入ることはない。特に漢族を閉め出しているわけではないが、漢族の方も何らかの理由がない限り、入ろうともしない。

漢族にとっては、数も少なくひっそりとした清真寺よりも、むしろ清真食堂の方が目につく。数が多いだけでなく、繁華街にあり、アラビア文字による看板などもあるからである。従って、清真寺が目に入らなくても、清真食堂があるということは、その街に回族の人々が一定数住んでいることを表している。

三　回民・回族・穆民

ここで、回族と回民など、民族の自称、他称について言及しておきたい。歴史的には「回回」などと呼ばれ、困窮した清代には「窮回」などという差別的な名前で呼ばれることもあったが、中華人民共和国成立以降、少数民族としての地位を与えられ、公式名称として「回族」と呼ばれるようになった。しかしながら「回族」というのは、行政上、あるいは民族学的な名称であって、回族自身は日常、あまり使うことはない。使うとしても「漢族」との対比において使われることが多い。これは我々が日常、自らを呼ぶ際に「日本民族」と使わないのと同じである。

では彼らはどう呼ぶかというと、「回民（フイミン）」というのが一般的である。この語がいつの時代まで遡るのかは定かでないが、「回族」という名称が与えられる以前から、自称、他称としてよく使われていたものである。この語から派生して、回民は漢族のことを「漢民」ということもある。

このほか、ムスリムの漢語表記である、「穆斯林」から、「穆民」という言い方もある。これは「ムスリム」の意味である。もっとも、彼ら自身、それほど厳格に「穆民」と「回民」を区別していないようで、よく回民から「日本有多少回民？」と聞かれることがある。この場合は「回民」を「穆民」の意味で使っているのであるが、「回民」さらには「回族」は中国独自の歴史的な産物であって、中国にしか存在しないということは、一部の知識人を除いて、回族自身、よく分かっていないようである。

四　回族自身による回族の定義

河南省の開封で回族の人に話を伺ったときのことである。北羊市場で露天商を営む回族の年輩の女性は、私に回族と漢族との違いについて、回族は第一に「不喫猪肉」（豚肉を食べない）、第二に「不埋棺材」（土葬の際に棺桶を埋めない）、第三に「不燒香」（線香をたかない、即ち廟に参拝に行かない）の三つをあげてくれた。明確な区別だが、よく考えるとこれは生活上の表面的な差違であり、ある意味、漢族側の回族に対するイメージでもある。それを回族自身の口から聞いたというのが興味深かった。それは漢族のイメージを

回族側も受け入れているということを意味しているからである。

もう少し熱心な信者となると、歴史的な視野をもった定義を語ってくれた。やはり開封の清真寺で、親しくなったある男性の回族に、自分自身のアイデンティティーを質したことがある。一見、漢族と何ら変わらない顔立ちの李氏は、しばらく考えた後、「我老祖先是従外国過来的。我是生長在中国的回族穆斯林」（私の祖先は外国からやってきた。私は中国で生まれ育った回族のムスリムである）と答えてくれた。この短い定義は全てを言い表している。これはいわば核となる部分であり、先の女性が話してくれたのは表面的な差違ということができよう。

五　清真寺の再建とムスリムとしての宗教生活

南京市内には、民国期、義学や女寺を含め、三〇座近い清真寺が活動していたが、その後、一九五八年の宗教改革で七座に整理統合され、さらに文革期には全ての清真寺が閉鎖を余儀なくされた。

改革開放以降、徐々に清真寺も再建され、私が調査した時点で、太平路清真寺、吉兆営清真寺、浄覚寺の三つの清真寺が活動を行っていた。

清真寺では早朝から夜まで、一日五回の礼拝が行われているが、実際に礼拝に訪れる信者の数は、太平路清真寺、吉兆営清真寺で十数人、浄覚寺で二〇数人である。しかもそのほとんどが退職した近所の老人で、彼らは「郷老」と呼ばれ、清真寺の活動を支える大事な役割を果たしている。若年や壮年の信者は仕事があって来ることができない。仕事をもった人が集まれるのは夜七時と八時に行われる礼拝で、この時には若干人数が増える。

それにしても、市内で四万人いる回族のうち、日々の礼拝に訪れる人が、三つの清真寺を併せて四〇人ほどしかいないということになる。割合にして一〇〇〇人に一人である。いかに一般の回族の人々が信仰生活から遠ざかって生活しているかが分かろう。もっともムスリムにとっての祝日である金曜の「主麻」礼拝には、普段よりも多い二〇〇人ほどが浄覚寺に集まる。それでも二〇〇人に一人の割合である。

ムスリムには年に三つの大きな祭りがある。開斎節（断食明け）、古爾邦節（斎牲節）、聖紀節（モハメッドの生誕・逝去の日）がそれで、三大節日と呼ばれている。このうち、私は吉兆営清真寺にて執り行われた聖紀節に立ち会うことができたが、集まる信者の数は数十人といったところであった。しかし、特に開斎節（断食明け）は盛大に行われ、回族はこの日公休となり、浄覚寺には四〇〇〇人の信者が集まるという。それでも割合から言うと、一〇人に一人の計算になる。

もっとも仏教徒でも毎日参拝に行くわけではないし、初詣がその年の最後の参拝になる人も多い。それでも仏教徒にかわりはないので、一概に礼拝への参加だけで信仰生活を問うのは当を得た方法ではないかもしれない。

イスラム経学院で学んだ学生やアーホンなどを除き、一般の信者の中では、毎日礼拝に来るような人でも、アラビア語を読める人はほとんどいない。もちろん、挨拶や礼拝の時に必要なアラビア語の表現は覚えていてスラスラと出るが、コーランをアラビア語で読めるわけではない。従って、礼拝の説教などは漢語で行われる。

六　イスラム知識の普及

では、一般の回族はアーホンの説教以外、どうやってイスラム知識を得ているのであろうか。漢語によるイスラム知識の普及に一定の役割を果たしていると思われるものに、各地の清真寺で販売されている、イスラム教に関する漢語小冊子がある。これらの小冊子の多くは、北京や鄭州、寧夏、昆明などの著名な清真寺で改革開放以降に発行されたものであるが、ほとんどは民国期に刊行されたもののリプリントとなっている。宗教活動の再開にともない、急遽、民国期の冊子を再発行してイスラム教の知識の普及につとめたものと考えられる。

これらを内容別に大別すると（一）ムスリムとしての総合的な知識を紹介したもの（二）イスラム教概観、あるいはイスラム教義の解説（三）劉智などの回儒の著した回教文献（四）沐浴や礼拝の方法、葬儀と婚姻の方法を記した実用書（五）コーランの選集（六）その他、故事を集めたもの、科学とイスラムの読み物、歌集などの六つに分けることができる。

このうち、（一）のムスリムとしての総合的な知識を紹介した冊子である、『穆民常識』を紹介してみたい。編者の穆罕穆徳・欧拝頓拉は、前言にて、本書の出版の理由を以下のように記している。即ち、近年来、我が国のイスラムの美しい花は、残虐に踏みにじられ、計り知れない損失を受けてきた（文化大革命時期の弾圧を指す）。各種の経書や文物は焼かれたり破壊されたりした。党中央が党の民族政策・宗教政策を恢復したものの、多くの信者、特に青年層は、既に学習の時期を失い、補習の教材もなく、皆、教義一般の学習を渇望している状態である。そこで各方面の同志が、関連する文献や教典を探し回り、湖南常徳の「高級課本」（上級向けの教科書）を見つけだした。我々の理想を満たすものではないが、内容も豊富で、実用的な良い教材になると考え、新たに校訂作業を行い、重印することにした。これ一冊あれば、日常生活中の多くの問題を解決することができるであろう、としている。

前言の日付は一九八三年となっており、改革以降、直ちに本書の刊行にむけて動いたことが想像される。それにしても、現代の視点から新しく本を著すのではなく、かつて発行されたテキストを再版せざるを得なかったということは、中国におけるイスラム教義の研究の長い中断が、どれほど大きな打撃を与えたかを物語っていよう。

本書の内容は、第一部がイスラム教の教義、第二部がイスラム教の禁止事項、第三部が葬儀の手順、第四部が婚姻の手順、および夫婦のあるべき姿などが、具体的に解説されている。第一部では、穆民（ムスリム）とは伊瑪尼（Iman、即ちイスラムの信仰、信念）を持った人であると定義され、伊瑪尼の綱領として、（一）真主、即ちアラーを信じること、（二）聖人を信じること、（三）天仙、即ち天神を信じること、（四）経典、即ちコーランを信じること、（五）後世を信じること、（六）前定を信じること、の六つが具体的に解説されている。続いて、庫府勒（Kufur、Iman の否定や迷信などを指す）についても取り上げ、どのような行為が庫府勒に当たるかが説かれている。

第二部では、イスラムにおける禁止事項、換言すればムスリムが守らなければならない事が説かれている。具体的には、小浄（清潔な水で肢体の一部を洗い清める）や大浄（清潔な水で肢体の全体を

洗い清める）の具体的な方法、大浄を必要とするものとして性交、月経や産後血、汚水なども詳しく説かれている。この他、日々の礼拝や聚礼日（ジューマ礼拝）の際の作法も説かれている。

第三部は、ムスリムとしての葬儀の執り行い方が詳しく述べられている。即ち、臨終を迎えた時から、遺体の洗い清め方、遺体の包み方、「出殯」（イスラム教徒は遺体を棺桶に入れないので出棺とは言わない）などの手順が具体的に述べられている。この他、信仰を実践する際に求められる五功のうち、斎戒および天課、朝覲についても述べられている。

第四部は、ムスリムとしての婚姻の執り行い方のほか、乳親（乳児に一口でも乳を与えた女性は親族となり、乳母の親族も婚姻の対象からはずれること）に対する注意が述べられている。このほか、夫道、婦道、父道、子道など、夫や妻、父や子として守るべき道についても説かれている。最後に、衛生と飲食の問題、および異端についての説明が付されている。

本書からも、教義の解説、沐浴と礼拝、葬儀、婚姻といった四つの項目が、中国に生きるイスラム教徒として最も基本的な事柄となっていることが理解できる。もっとも、今日の回族が置かれている状況からして、記述の内容が必ずしも現実的でない部分も散見する。一例を挙げれば、葬儀の場合、基本的な手順は不変だが、革命以降は回族も漢族同様、追悼集会形式で行っている。また「出殯」の際も、都市部では肩で担ぐことはなく、自動車で墓地まで移動しているのが実状である。とは言え、当時、問題とされた漢族の風習との違いなどは、今日でもそのまま当てはまるものとなっている。乳母の問題もそうであるが、葬儀の場合を例に取れば、限られた焼香の場面、号泣してはならぬ、豪華な墓石を造らない、「帯孝」をしない、祭日における過度の飲食を慎むなど、漢族の習慣とは全く逆であるだけに、回族としてはイスラムの教えを忠実に守っていくのは容易ではない。現代中国に生きる信者としては、現実に即した新たな指南を求めたいところであろう。

冊子類は、一冊数角から数元と安価で、相当数が全国に流布していると考えられるが、正式な出版物ではないため、正確な出版部数などは不明である。しかしこうした小冊子が、漢語しか理解しない一般の回族に対して、イスラム知識の普及という点で一定の役割を果たしていることは間違いなかろう。

七　漢族との文化の差

自己の意識とは別に、第三者からみて回族の文化的な特徴、あるいは漢族との差違はどこにあるだろうか。熱心な信者が清真寺へ赴いて礼拝をすることは、漢族にとって大きな差違と映るが、これ以外の差違についてみてみたい。

（一）食生活

日常生活の中で目につくのは、はやり食生活であろう。若い人のなかには、漢族とのつき合いの中で、お酒を口にする機会もあるであろうし、たとえ豚肉などを食べないにしても、その他の食材が必ずしもコーランの教えに従って処理されているわけではない。圧倒的多数の漢族に囲まれて生活している回族にとっては、厳格にイスラム教徒としての食生活を守るのはたやすいことではない。食生活がどれだけイスラムの教えに従ってなされているかは、個人差が大きいようである。

そうしたなかで清真食堂の存在は、イスラム教徒としてのアイデンティティーを確認する重要な文化的な場となっている。現在では、結婚式の披露宴も清真食堂で行われることが多い。また清潔なことから、漢族も好んで清真食堂に入る。

このように食生活に関しては、個人のモラルに任されているのが現状であるが、漢族によって教えに反する食生活を強制されることに対しては、大きな反発がある。具体例が、文革時、回族に対する嫌がらせとして豚肉を食べさせられたことがあった。この時の体験を話してくれたある回族の人は、この時のことは今でも許せないと怒りをあらわにしていた。

なお、解放前の南京には、個人が経営する宰牛場が一〇数あったが、解放後、国営や「集団」に改編された。改革以降、再び個人が経営する宰牛場が認められるようになり、南京には二〇ほどの個人経営の宰牛場があり、回族に牛肉を提供している。

（二）人生儀礼

食生活とならんで回族のアイデンティティーにとって重要なのが、出生・婚礼・葬儀などの人生儀礼である。回族には、子供が生まれてから三～一四日の間に、アーホンが男の子なら「穆罕默德（ムハンマド）」、女の子なら「阿衣涉（アイーシャ）」などといった「経名」をつける習慣がある。西北地区ではこの習慣が守られていたようであるが、南京ではそれほど行われてこなかった。ところが、改革開放以降の清真寺の再建にともない、南京でも「経名」をつける習慣が復活しつつある。例えば、吉兆営清真寺の金アーホンによると、赴任してきた一九八八年から、毎年二～三人、「経名」をつけているという。

婚礼は、かつては式に際してアーホンを呼んだが、現在ではそうする人は少なく、回民飯店で宴会を開くというのが多くなっている。従って、現在の回族にとって人生儀礼の中で最も重要なのは、葬儀となっている。

死者が出た場合、イスラムの教えでは、「一五個礼拝之内（即ち、三日以内）」に埋葬しなければならない。南京でも回族の葬儀は厳格にイスラムの教えにのっとって執り行われている。調査当時、市内の葬儀は浄覚寺内にあった殯葬服務社が執り行っていた。亡くなると遺体はすぐに清真寺に運び込まれ、「冷蔵櫃」（遺体の腐敗を防ぐために、遺体を電力で冷蔵する装置）に収められ、「霊堂」に安置される。そして遺族は、親戚友人の弔問をうける。なお、私が立ち会った葬儀では、遺族は肩のところに黒い布をつけて「帯孝」をしていた。これは漢族の習慣であるが、回族もするようである。孫の代のみ、黒い布の真ん中に紅色の布をさらにつける。弔問者は、「花圈」（花輪）や「帳子」（色鮮やかなベッド・カバー）を送る。これを送るのも漢民族の習慣で、この点に関しても漢化しているといえる。現金を送る習慣はない。ちなみに、回族の人々は、人が死ぬことを「帰真」、遺体を「埋体」（アラビア語から）というように、漢族とは違った語彙を使う。

そして三日目の午前中、清真寺内の正廳にて追悼会形式の簡潔な葬儀が執り行われる。その間、アーホンが遺体を儀式にのっとって洗い、白い布でくるみ、さらに緑色の美しい布で覆って「箱子」に納め、正廳の真後ろに台に載せ安置する。「箱子」は漢族の棺桶に相当するが、漢族と違って遺体と一緒に埋葬することはない。追悼会が終わったところで、遺族や親族友人らが遺体と最後のお別れをする。中には、「亡人」に向かって「三鞠躬」する人もいるが、「三

鞠躬」の習慣は回民も漢民も一緒だという。庭に戻った参列者は、そこで各自、線香をたく。そして「出殯」となる。かつては「箱子」を包む部分に、装飾を施し、墓地まで担いで運んだが、現在の南京では車で搬送する。回民の公墓は、江寧県の花神廟と崗子村にある。墓地まで行くのは遺族やごく親しい友人などで、大半の人は、仕事もあるので、ここで散会する。

墓地に着くと、すでに埋葬すべく、緑色の美しい布に包まれた遺体を「箱子」から取りだし、埋葬場所まで運び、遺体を包んでいた緑の布を取り、アーホンの立ち会いのもと、埋葬される。この時の姿勢は、頭を北に向けて南北に横たえ、顔はメッカの方向である西に向ける。土盛りも長方形にし、漢族のように円錐形にすることはない。埋葬後、「看墓的」（管理人）に挨拶を済ませ、登記を行って、車に乗り込んで市内に戻る。これで葬儀は終了で、漢族の葬儀にみられるような賑やかさは一切ない。

回族の人々は、故人の命日に「油香」という小麦粉製の餅を油で揚げた食品を、親戚や近所に配る習慣がある。これをするのは七日目、一四日目、一〇〇日目、一周年、二周年などとのことであった。埋葬後、半年ほどして土盛りが固まってくると、墓の回りにレンガで囲いを作る。葬儀の費用は、後日墓に立てる石碑も含め、全てで八〇〇余元とのことであった。

八　回族アイデンティティーの多重性

南京を含めた各地の回族の人々と話しをするにつけて、回族といってもそのアイデンティティー意識のありようには、地域差や個人差が大きいことを改めて思い知らされる。西北と内地とでも大きく異なるし、内地でも都市部と農村部とでもまた異なる。南京近郊の各県にも、かつては清真寺が存在したが、現在ではまだ再建途上にある。従って農村部に住む回族は、礼拝にいきたくてもいくことすらできないわけである。当然、食生活の面においても、イスラムの教えを忠実に守るのは都市部の回族以上に難しい。

また、信仰の面では、個人差も大きい。南京において、回族の知識人と回族のアイデンティティーについて議論したことがある。彼によると、南京の回族をアイデンティティー意識の強さで分類するなら、以下の三つに分けられるという。（一）伝統を保持しているが、しかしどこかに無理や不満がある。（二）信仰や生活面でも完全に漢化し、自ら回民であることもいわない。（三）自己の文化を保存しながらも、改革の必要性を痛感している人びと。先進的な知識人がこれにあたり、アイデンティティー意識でもっとも葛藤しているのもこの人びとであるという。

回族としてのアイデンティティーは、さらに同一個人でも、アイデンティティーを強く意識する時とそうでない時とがある。即ち、日々の礼拝は仕事の関係でいけないが、金曜日の「主麻」礼拝にはいくという人もいる。あるいは普段は清真寺にいくことはないが、開斎節（断食明け）、古爾邦節（斎牲節）、聖紀節（モハメッドの生誕・逝去の日）といった「三大節日」の時だけは清真寺にいくという人もいよう。

三大節日の際も清真寺に行くことがないという人でも、イスラム教徒である限り、人生を終えたとき、イスラム教徒として葬儀が執り行われれ、埋葬される。即ち人生の最後になって、「イスラム教徒になる」（正確に言うと周囲の人間がそれを再確認する）という

ことが起こり得る。

というのは、南京で調査中、とある葬儀に出くわし、そこで以下のような体験をしたからであった。遺族の許可を得て、埋葬の現場まで立ち会わせていただいた時のことだった。遺体を人夫が墓穴の底に安置すると、人夫が墓穴からはい上がり、直ちに回りの土盛りをくずして土で被う。この時、遺族らが各自、少しづつ土をかける。この段階が埋葬のいわばクライマックスのようで、アーホンが山側に立ったまま、コーランの一節をとなえるなか、土がかぶされる。この時、「亡人」の夫人があまりに泣き叫ぶので、アーホンが「そんなに悲しんではならない」というようなことを言った。

遺族が土を被せるとき、「亡人」の子供のしぐさが非常に印象に残っている。アーホンが読経をするとき、両手を顔に近付けて顔を洗うようなしぐさをする。これはムスリムがいつも礼拝の時にしていることであるが、「亡人」の子供は恐らく清真寺にいって礼拝をしたことがないのだろう、アーホンや回りの人のを見ながら、いかにも、ぎこちなさそうにこの動作を行った。しかし、その瞬間、彼は自分が回民、即ち、西アジアから渡ってきたイスラム教徒の子孫であるということを、明確に再確認したことであろう。それは、顔立ちは全く漢民族と変わらないのに、親の突然の死とその埋葬を目の前にして、彼が、ある意味では生まれて初めて、イスラム教徒に「なった」瞬間であった。土を完全に盛らないうちに、全員で「三鞠躬」をすると、人夫を残して直ちに皆が其の場を離れ、埋葬は終了した。

後日、上海郊外にある回民公墓を訪れたことがある。土葬にしては墓石どうしが接近しているので、このことを質すと、文革当時、回族も火葬を強いられたが、改革開放以降、改めて土葬が認められるようになったので、火葬された灰を掘り起こし、改めてそれを土葬したのだという。回族の人々の土葬への思い、ひいてはイスラムの教えにのっとった埋葬に対する強い思いを改めて痛感したものであった。

九　新しい復興運動

内地の清真寺は伝統的に中国式の建築様式を取り入れているのが普通で、内部に一歩足を踏み入れるとミハラーブがメッカの方向に向かって設けられており、まぎれもないモスクであるが、外見上は仏教や道教の寺院のようにみえる。これは思うに、漢族との不必要な摩擦を避けようとする配慮に基づくものと考えられる。ところが近年、清真寺の改築に際し、アラビア式の建築様式を取り入れるような動きがみられる。

河南省の開封でいうと、王家胡同清真寺がその最初の例である。王家胡同清真寺はもともと東大寺に通っていた王家胡同の信者らが自分たちの近くにも清真寺を、ということで民国期の一九三七年に設立したものである。その歴史は新しいが、この清真寺は著名なアーホンが集まり、多くの有能な学生を育ててきたことで信者の間ではよく知られている。こうした民国期以来の盛んな宗教活動の伝統からか、王家胡同では文革後の再建を機に、信者の募金も加え、一九八九年にアラビア式建築の礼拝堂を完成させた。私が訪ねた当時は、礼拝堂以外のアーホンや学生の宿舎などは中国式の建築様式のままで、今後、資金が貯まるごとにアラビア式の建物に改築していきたいと話していた。

開封以外の場所でも、王家胡同清真寺のアラビア式の建築のことは知る人が多く、自分の所も次に建て直すなら、アラビア式の建築にしたいという話を聞いたことがある。

実際、南京でも、回族が集住している建鄴区の七家湾では、街並みの再開発の計画が持ち上がっており、古い平屋を解体して高層アパートにする計画があるが、その際には建物の一部をアラビア式の建築にし、その中に回民を入居させる予定である、との話を聞いた。

こうした復興運動は、西北の地が震源地のようで、その影響を内地回民が受けている、という情況である。従って、内地回民の内部でも、西北に近い方ほど、回族としてのアイデンティティーを強くだしている。開封がそのいい例であろう。実際、例えば開封の回族は礼拝時のみならず、街中でも白帽をかぶっている。従って顔立ちは漢族と同じでも一目瞭然でこの白帽によって回族と識別することができる。開封の回族はむしろ誇りを持って堂々と白帽をかぶっているような印象を受ける。一方、南京の回族が白帽をかぶるのは礼拝の時のみで、街中ではどこかかぶりづらい雰囲気があるようである。このことをとある回族の知識人と話すと、解放前、南京の回民も白い帽子をかぶっていたとのことであった。開封の回族もいずれは現在の南京の状況になるのではないか、と話されていた。いずれにせよ、内地の回族のアイデンティティーの表現方法は、地域によって大きな差がみられるのが現状である。

十　内地回民がかかえる現実的問題

圧倒的多数の漢族に囲まれて生活する回族にとって、厳格にイスラムの教えにのっとった生活を行うのは、容易ではない。礼拝や食生活、人生儀礼については既に述べたとおりである。このほかにも、さまざまな現実的な問題が存在する。

一つは経済的な問題である。改革開放の中にあって、回族の人々は必ずしも積極的に事業を起こし、その恩恵をうけているとはいえない。清真寺によっては、境内に招待所を設けたりして副業を行っているところもあるが、概して豊富な資金力があるとはいえない。

漢族との経済的な格差は、通婚をめぐる問題にも影を落としている。即ち、回族の女性がより豊かな漢族の男性との結婚を望む傾向があり、回族の男性にとって回族の女性と結婚することが難しくなっているという。回族の男性が漢族の女性と結婚する場合は、漢族の女性がイスラムに改宗することが求められるため、これも容易ではないようだ。この問題を解決するため、市内には「回民婚姻紹介所」が設けられているが、必ずしもうまく機能してはいないようである。

こうした情況に対して、回族にも少数民族としての優遇政策が取られているが、都市に住む回族にとってはそれほど大きなメリットはないようである。

調査当時、南京における回族に対して、肉や油の補助が行われていた。肉の補助は一ケ月四元五角（単位に所属していない人は、糧站が現金を支給）、油票の補助が一ケ月七両の油票（漢民族に対しては五両）となっていた。このほか、一年一度（開斎節の時）一両の油票が追加支給されていた。もっとも当時から、油票に関しては、金さえあればどこででも油を買えるようになっていたため、それほど意味がないとのことであった。

一人っ子政策に関しては、江蘇省は人口が多いため、昔から漢族

と同じ扱いとなっている。なお子供の「民族」の選択権であるが、両親のどちらかが回族の場合、子供は希望する「民族」を選択することができる。実際には子供が生まれると、親がすぐに「回族」と決めることが多い。本人が一八歳になるともう一度選択することができるが、一般に変更することはないという。

大学入学時の少数民族の優遇措置であるが、民族学院（中央、地方を問わず）なら、二〇点追加というのがあるが、少数民族地区の学校を別として、全国の大学において優遇措置が制度化されているわけではないという。

回族の子弟の教育の問題は、実は回族のアイデンティティーとも関係する大きな問題となっている。即ち、圧倒的多数の漢族に囲まれて生活している回族にとって、優遇政策をうけて少数民族として生活していては、いつまでたっても漢族と「互角」に勝負することができない、という現実が存在するからである。南京でも「回民中学」の建設をめぐって、賛否両論が交わされていた。市内の回民が集住する「七家湾」地区には回民小学校がすでに存在するが、回民中学校の建設は少数民族としての回族にとっては一つの夢でもあるようだ。その一方で、漢族の中学校に通い、漢族と同じ試験を受けて名門大学に進学することが、回族の地位を向上させるうえで不可欠であるという現実も存在するからである。

さらに近年は都市の再開発にともない、従来の清真寺の回りに回族が寄り添って住むという情況から、市内の回族も各地に建設されている高層住宅に分散して住む傾向が出てきている。これも清真寺を中心とした従来の回族コミュニティーのあり方を、今後、大きく変えていくものと考えられる。

漢族側の回族に対する理解も、回族の人々にとっては大きな問題であろう。私の印象では、少なくとも南京の漢族は回族に対して、特になんの関心ももっていない、というのが現実のようである。漢族側がマイノリティーとしての回族の宗教や文化を理解し、共生していこうとするには、回族の人々はあまりに少数であるし、表面上は漢族となんら差違がないため、そういった自覚もうまれにくいようである。

今後も南京の回族の人々は、圧倒的多数の漢族に囲まれながら、「ひっそりと」信仰生活を守りながら、暮らしていくことであろう。そしてその内部は、今後とも、さまざまな立場や、回族としてのアイデンティティーにも大きな差違を持った人々によって構成されていくであろう。その意味で、回族全体は決して「一枚岩」ではないが、南京の回族だけをとっても、その内部は漢族との関係において実に多様な世界を構成している。それでいて、回族として一体をなしているのもまた事実である。

この点、回族はある意味で、「漢族」の縮図でもある。従って、回族の研究は、そのまま「漢族」や中国における民族とは何か、という問題とも直結しているといえよう。

注

（1）西澤治彦「南京における清真寺および回族の概況調査報告」『言語文化接触に関する研究』第六号東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九九三年。「中原のイスラーム教徒」曽士才・西澤治彦・瀬川昌久共編『アジア読本・中国』河出書房新社、一九九五年。「西からやってきた異教徒——

江蘇省における回族の移住」可児弘明ほか編『民族で読む中国』朝日選書、一九九八年。「回族の民間宗教知識――漢語小冊子に説かれたイスラム」末成道男編『中原と周辺――人類学的フィールドからの視点』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（市販版は風響社より同名で発売）、一九九九年。